

Wixted, John Timothy, 第七十九回記念会に参加してアメリカ J・T テイム・ウィ  
ックステード〔所信を述べる〕 (Remarks by J.T. Wixted on the Occasion of the  
Seventy-ninth Memorial Service for Mori Ōgai) 森鷗外記念会通信 (Newsletter of  
the Mori Ōgai Society) 132 (October 2000), pp. 1-3.

# 森鷗外記念会通信

No. 132 秋

(October 2000)



「鷗外」第79回忌記念集会で所信を述べる  
アリゾナ・ステート州立大学  
ティム・ウィックステード 教授

[2000.7.9]

## 第七十九回 記念集會に参加して

アメリカ J・T ティム・ウィックステード

今日は鷗外忌記念集會に参加するご招待いただきまして、誠に有難うございます。この場で話をさせていただくのを大変光榮に思っております。こんなにたくさんさんの一流の鷗外学者の前でちよつと話をさせていただくのは遠慮いたします。

私が現在取り組んでいる研究テーマは森鷗外の翻訳文学です。ご存知と思いますが、鷗外の作品の優に3分の1は翻訳です。それがもちろん日本の近代小説、



戯曲、詩歌の発展に大きな影響を及ぼしました。その翻訳の90%以上は、ドイツ語の原文からで、残りは中国語からです。私は両方の面に興味があります。

ちよつと三十年前に私は京都大学の人文科学研究所で二年ほど留学して、恩師は吉川幸次郎であり、あとで吉川先生の『元明詩概説』という本を英文に翻訳しました。その上に、自分自身の中国古典漢詩についての本を二冊書いて、そのほか「日本の中国学専門家ハンドブック」という本も出来ました。

鷗外の場合、私が興味を覚える中国文学の部分というのは、三つがあります。

①鷗外自身作の233篇の漢詩、②鷗外が『於母影』に訳し、私が吉川先生の訳文でその一部を翻訳しなければならなかった高啓の「晋丘子歌」、そして③私のアメリカの大学（アリゾナ・ステート州立大学）で日本語の授業の教材として取り上げた鷗外的重要な短編、「寒山拾得」と「魚玄機」です。

そのほかの面では、鷗外の翻訳作品のほとんどがドイツ語から、あるいは、ド

イツ語に訳されたものであるということから、私のドイツ語、ドイツ文学に対する興味再び沸いてきたのです。

今研究しているのは、鷗外の「即興詩人」と「ファウスト」など他の翻訳は、翻訳の両極端のどこに位置するのでしょうか。つまり、字義通りの訳と自由訳、忠実な訳と翻案、誤謬と正確さ、そして、翻訳元の文体と翻訳先の文体をどううまくからみ合わせているのでしょうか。また、ポストモダンの概念が、鷗外の作品にどれほど適当な分析道具の役割をしているのでしょうか。このように、鷗外の研究を通じて、私の研究してきた関連の分野がまた束ねられてくるのです。

今日の機会で、鷗外の次女である小堀杏奴が書いた『即興詩人』についての随筆の抜粋を読まさせていただきました。

始めて：『即興詩人』を読んだのは父と死別した十三歳の年であった。：父の死は、私にとって性格を一変させるような激しい打撃であり、周囲の大人たちが、鷗外は死んでも死なない、つまりその作品は永遠に残るといったことを話し合う

のを聞き、その言葉に取り纏る  
氣持で父の書いたものを読み  
はじめたと語っていた。

『本の本』2.12. 1976.12)

誠に、その通りではないかと思えます。  
本日は、このような話をさせていただき大変嬉しく思いました。皆様によろしくお願い致します。ご招待いただき光榮でした。有難うございました。